

棹

太



加藤虎之助  
しげき画

第九拾七號

東京 太 棹 社 發行

# 胃腸にミカラチ

東京市日本橋區通二ノ五  
新潮製藥株式會社  
電話日本橋三八二番  
振替東京七〇一〇八番

空氣がよくて

閑靜なアパート

(省線蒲田驛下車松芳雜貨店より左へ入る)

蒲田區御園町二ノ一四

シルヴァハウス

電話蒲田三六二一番

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八

平

塚手

# 本 社 創 立 十 週 年 大 會

## 記 念 寫 真 帖

昭 和 三 十 年 七 月 六 日 於 並 木 俱 樂 部

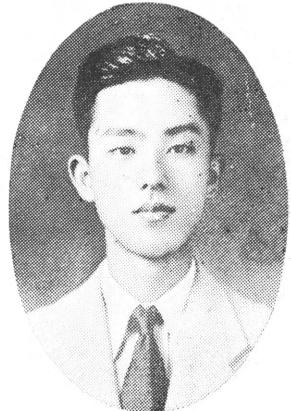
— 寫 真 抽 籤 組 順 —



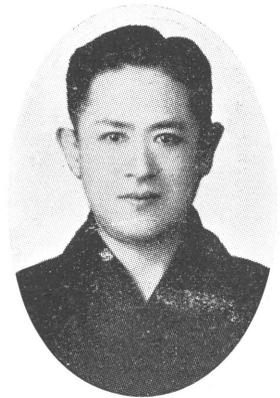
平 井 壽 樂 氏



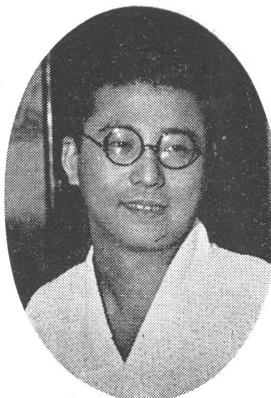
島 倉 仙 昇 氏



平 井 周 樂 氏



野 田 高 尾 氏



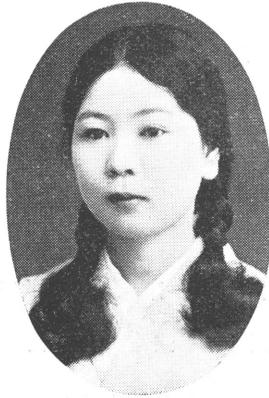
安 藤 都 昇 氏



手 塚 つ か 氏



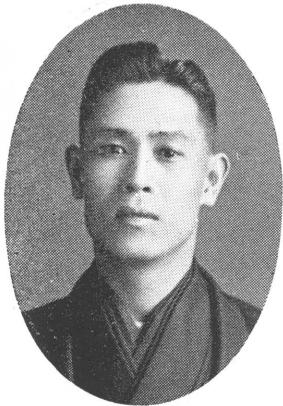
小川都川氏



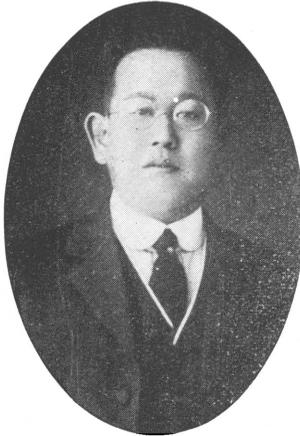
鈴木喜三子氏  
なかめ代演



乃村乃菊氏



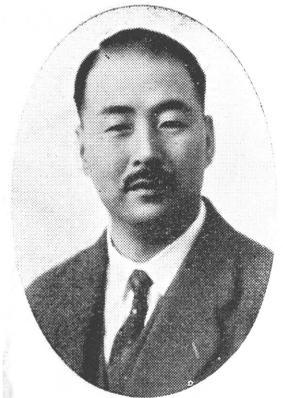
近江清華氏



川奈部銀司氏



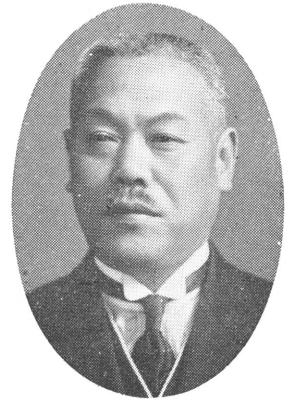
吉田登盛氏



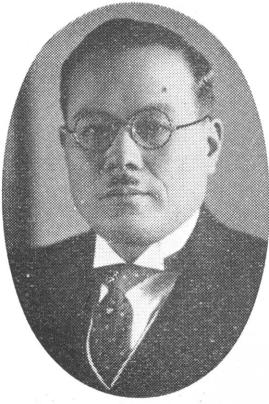
河野國聲氏



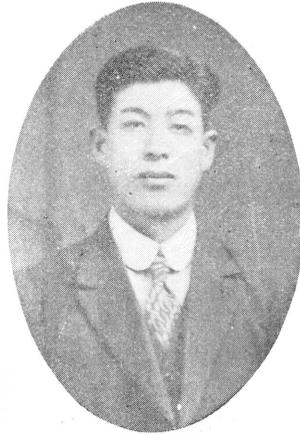
歸山歸世花氏



岩木義雀氏



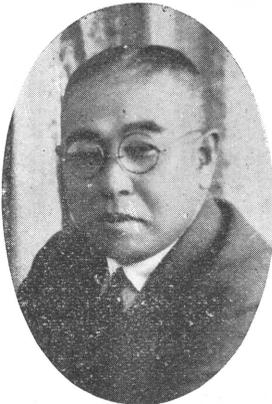
藤本喜鳳氏



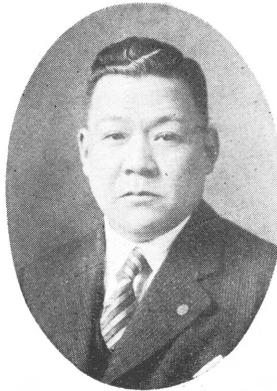
廣瀬いろう氏



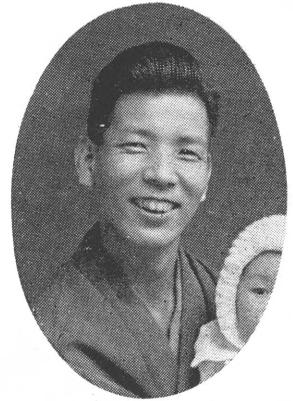
黒川叶氏



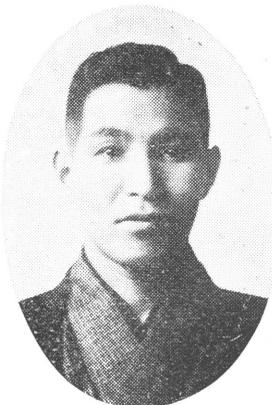
湯原清司氏



田口司重氏



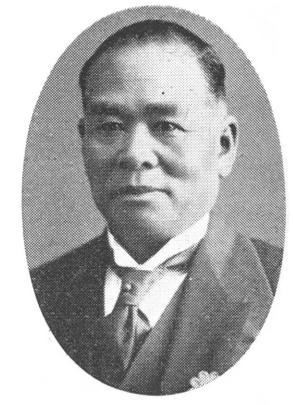
武笠宏亮氏



根本岡壽氏



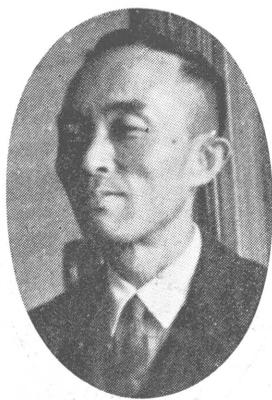
大田大嘉津氏



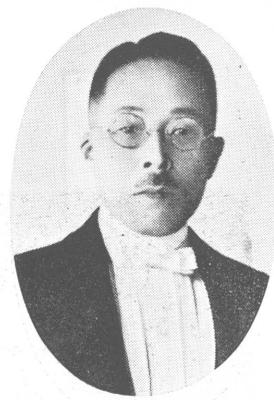
小埜長と氏



角井 豊氏



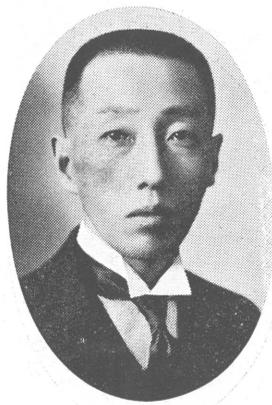
吉良 蟻若氏



北村 三葵氏



井上 巽氏



星野 桔梗氏



的野 關路氏

以上の外出演諸氏

- 村越廣氏
- 越廣氏
- 國井都氏
- 保々長平氏
- 宮本百塚氏

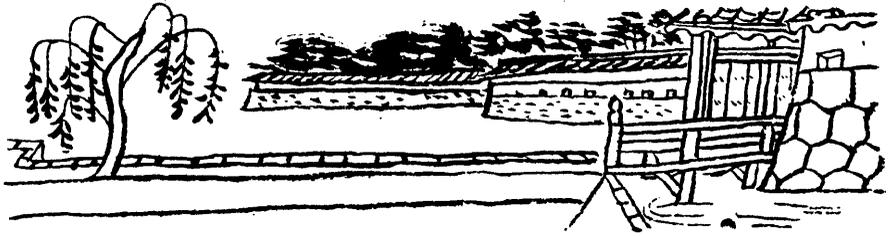
御寫眞が間に合はず、残念ながら掲載  
 洩れとなりました。

(照參事記) 會賀祝賞入に並關大兩



氏旭川及・氏鳳金田金・師助之道澤野・氏操瀨高——り上右へ向真寫





## 太 棹 第九拾七號目次

義 太 夫 雜 話	齋 藤 拳 三 (二)
義 太 夫 レ ヲ ユ ヲ 『 千 本 櫻 』	川 端 柳 蛙 (四)
前 號 の 義 太 夫 雜 話	富 取 芳 河 士 (六)
拙 評 妹 背 山 に 就 て	齋 藤 拳 三 (七)
本 社 創 立 十 週 年 記 念 大 會	(八)
音 曲 昔 噺 素 養	鐵 老 生 (三)
太 棹 社 彙 報	(四)
當 座 帳	(二〇)
編 輯 後 記	芳 河 士 記 (二〇)

口 繪……本社創立十週年大會記念寫眞帖・兩大關並に入賞祝賀會  
 表 紙・カ ッ ト……………宮尾しげを……………

# 義太夫雑話

齋藤拳三

## 故名人總供養

今月は盂蘭盆である。私の様な無信心な者でも先祖の祭だけはする、と何時も私は自分の愛好した藝術家の供養をした様な氣になる。其の内せひ一度お墓参りをしなければならぬと思つてゐるが、嘶家の古今亭志ん生である。此の人の高座が私は大好だつた。先方ではしきりに私に逢いたがつてたそうだが、私の方は妙に逢いたくなかつた。死んでから未亡人から丁寧な手紙をもらつたが、其の内御邪魔するとの返事を出して置いたが間もなく私が病氣して其れ限りになつてしまつたのである。義太夫の方の故名人

の墓はほとんど全部大阪に有るらしい。

先月下阪した時攝津大掾と吉田玉造、

玉助親子の墓は御参りをした。

三代目大隅太夫と三代目鶴澤清六は命日には(時々忘れて五日位おくれたりする)義太夫好きの知人を呼んで其のレコードをかける。すると私は馬鹿に二人を賞るので、其れが自然に供養になると思ふからである。

大隅は大掾に比して餘りにも不遇悲惨な死に方をして氣の毒に思ふのと、清六は私の好きな古靱太夫を今日あらしめるに功勞の有る人として、亦藝質も私の知る限りの三味線では一番好きだからである。

古靱太夫は感心な人で故清六を徳として故人を忍ぶ爲か、故人の千兩轆の樽太鼓を舊レコードから複製し裏には故人の寫真を入れて知人に贈呈したものらしい私も一枚頂戴して持つてゐる、一寸めずらしい品だから拙稿御讀みの方で萬一聴きたい方でも有れば、御葉書でも頂けば一しよにかけて聽いて頂きたい、供養になると思ふ。

以下は私が色々の人から聞いた、亡き名人の高座の癖百態である、理由もなく例記するのが自分では供養のつもりなのである。

私が宮尾しげを君の様に繪が書けると圖解にするのだが。

## 五世竹本彌太夫

先月の文樂座で古靱太夫が新版歌祭文の油屋を語つた。今の津太夫も津太夫を襲名した翌年明治四十四年一月の興行に三世越路の野崎村に油屋を語つて居る。此の油屋を得意にした彌太夫で吾々の知つてゐる彌太夫(長子太夫)の一つ前の彌

太夫である。

此の人は床本をめくる時、紙の中央をグシャと掴んでは何かが癖だつた、で面白いのは其の後で語りながらもめくちやになつた紙の皺をいち／＼延ばしてゐるのである。妙な癖もあつたものだ。

今月織太夫の語る逆鱗も、大部分此の人の型が傳つて居る。彌太夫はシシヤツシンの所でコラシヨと入れる、非力で聲のない人だつたので色々工夫して語つたのである。

### 初代豊竹柳適太夫

此の人は毎日必ず右足から歩き出して家を出て、必ず左足で彦六座へ入る。其れでないと甘く語れない。

### 二世豊澤園平（清水町）

片衣を付けるのが中々むすかしやだつた、時によると中々氣に入らないで何度も／＼附けかへさせられる、一體園平は話も義太夫謂なので、話の合間に調子を附けて着せてやると喜んですぐ治まる。

此れは團友が名人だつた、團友なら大抵一度で用がたりたのである。

### 三世竹本津太夫（法善寺）

此の人も床本を紙の中央をつまんで開けたが、彌太夫程變な癖がないから平凡だ。

大掾と一座して居ては詰て語らなくてはいけないと云つて居た、自分の聲の氣に入らない個所をニジラして弾いてくれとよく合三味線に注文したそうである。

### 初代豊竹呂太夫

此の人の癖はなか／＼痛快である。見臺をたゞく時必ず膝を一つ打つてから見臺をたゞく、即ち二つづつ打つ譯である。

呂太夫では面白い話がある、或時調子を痛めたので「よく連中は玉子を呑んで高座へ上るそうだが、實際効力の有るものかどうかやつて見やう」と弟子に云つたが別段何の注文もしずに床に昇つた。語り物は尼ヶ崎で「ひつそぎ竹の猪突槍」

となつた、突然呂太夫は湯をくんで居た弟子に「玉子／＼」とどなつた、無論弟子は玉子の用意などはしてないからどうする事も出来なかつた、「主を殺した天罰」のあの高い節の前まで来て玉子を思ひ出すなどは無邪氣で大愛嬌である。

此の人は鰻が好物で、然も鰻を食べると聲が出てくると稱して給金の前借りをして食べる、其上お茶の玉露で食べるのだから振つてゐる。

### 攝津大掾

此れは亦反對で鰻を食べると調子を痛める。其處で女房は興行中は決して鰻を食べさせなかつた。千秋樂の夜になると大好物の鰻を食膳に附ける、大掾は大喜びで食べたと云ふ、此の人の特長は、九段目なら「御切腹」、和田合戦なら「四方八方」で語尾を延して長く引く時、あの太い眉毛を大きく上下に動かす、大掾黨が手の皮をすりむいて拍手した所である三代目越路太夫も知らず／＼此癖が似て居た。

### 三世大隅太夫

別に癖がない、湯を呑んで大急ぎで、よだれをふくのが馬鹿に早いのが特色、大隅だと馬鹿に節が短く、大掾だと馬鹿に節が長かつた様に思はれるが、九段目など其の所要時間は全く同じだつたそう、ついでに附記しておく。

### 五世組太夫

これは先年拙稿義太夫雑話に書いたから略す、朗々たる大聲で言葉尻を長く引くのが癖、組黨をうならせた所。

### 二世竹本長尾太夫

江戸つ子で豊島太夫から長尾を襲名した人、愁嘆場になると何時も右の眼だけに手をあて、泣く、圖解でもしたら一寸面白い癖がある。藝が甘いと此んな平凡な癖でもファンには懐しく感じられるものである。

## 義太夫レビュー

### 『義經千本櫻』を見たまゝ

川端 蛙柳

有樂座の六月興行に、東寶劇團の新らしい企劃として、義太夫を主としたレビュー「義經千本櫻」が上演された。

値か四十五分間に、千本櫻を發端から大詰までを上演すると云ふのだから、興味をそゝるに十分だし、それに古實家で新しい事を餘り好まぬ豊澤芳太郎君が、かゝる尖端的の作曲を引受けたと聞いては好奇心百パーセントだ。何を置いても見なければならぬと思ひながらも、多用に追ひ廻されて、千秋樂に近い十九日の夜にやつと見物した。全部で十景からなる場面が、次々に展開されて行く手際の鮮やかさに先づ酔された。その舞臺へ、壽美藏丈始め幹部の人達がチヨイチヨイと現はれる。こうした場合は、ともすると舞臺を投げたがるものだが、それを忠實に懸命に演技されたのは敬服の外はない。

義太夫受持の場面は、道行と四段目がその

主なるものである。

作曲は流石道行景事の古實に通じた芳太郎君の手になるものゆゑ申分なしてある。靜かな曲に始まつて、中程の早間の合の手などは義太夫の三味線のみが持つ雄大さを遺憾なく發揮してゐる。

その外狐に關してのあらゆる手を織込んだのも當を得てゐる。最もよいと思つたのは、道中にある平凡な手の中へ、替手をあしらつた事である、義太夫としては珍らしい事である、あるひは始めかも知れぬが、その趣向が非常に効果的で大成功である。

演者は、朝見太夫、巴太夫、卯太夫、團七扇之助、美之助、松市郎の諸君である。

受持時間は十五分か二十分に足らぬ時間てそれをチヤレ／＼に演じて行くのであるからよいとか悪るとか批評するのはコソクであるかも知れぬが、只感じたまゝを云ふて見るな

ら、太夫が餘り熱演すぎた事である。その爲舞臺の華やかさとピツタリ調和しないきらびがあつた。もつと餘裕を持つて樂な氣持で和らかにうたひ氣味に演じて貰ひたかつた。その爲作曲の眞意である道行景事の風を充分に活かし得なかつたのは残念である。

その實の一端は、巴太夫君が負ふ處少なくないと思ふ。同君は餘りにも大車輪で、力の籠つた大聲が、やゝともすると、シテの朝見君を凌駕した。その爲朝見君も自然力聲を張るやうになるのは當然の歸着である。その影響が全員に及ぼしてゐるかのやうに感じた。

これは心すべきことではなからうか、矢張り從來よりの約束の通り、ワキ語りは何處までもシテに従ふべきであると思ふ。

表からはチヨボにならぬやう、義太夫の本格を活かして演つてくれと註文されたと思ふ事だが、それらが超熱演の原因となつたのかも知れぬが、第一條件である舞臺との調和に意を用ひる事が演者の最大の覺悟であらねばならぬと思ふ。

三味線は實によく揃つて鮮やかであつた、劇場の床ではこれだけ息の揃つた三味線はめつたに聴かれぬと思つた。

その外感じた事は、朝見君の滋味のある語

り振り、團七君の眞面目な舞臺姿、扇之助君の颯爽たる撥擲きは、いづれも好感が持てた。

聞けば本年二月にも、東寶から芳太郎君へこうした計畫に就いて相談があつたのを、同君は斷はつたと云ふ事だが、謙遜家の同君としてはありさうな事に思はれる。併し衰運にある義太夫界としては、同君のこうした謙退なる態度には賛成出来ない。義太夫宣傳の爲には、こうしたチャンスは見逃がさずにシツカリと擲んで大いに努力して貰ひたい。

どちらかと云へば、義太夫には無關心な有樂座の客にも、今度のやうな素晴らしい作品を一度が二度、二度が三度と、機會のある毎に聞かせてやる中には、義太夫の持つ好きを判つてくる人が無いとは云はれぬ。譬へそれが一人であつても二人であつても、義太夫ファンを得ると云ふ事は、今の義太夫の最大の仕事ではなからうかと思ふ。

こうした意味から、芳太郎君の今回の仕事に歓迎を表し幸先を祝して、今後の努力に期待する次第である。(十三、六、二十)

## ◆ 籠花 ◆ 束花 ◆ 輪花 ◆

御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候  
新花・廉價・迅速は弊店の特色

# 花

下谷稻荷町(青バス車庫前)

サカタ・フロリスト

電話(下谷)六一八一番

# 前號の義太夫雜話

## 齋藤氏の妹背山の評に就て

富取芳河士

商工省自身がス・フの劣悪品なる事を天下に證明した話があります。それは今度の省令の中に、農民と労働者に限り綿製品の供給を許すといふことがありますが、これは農民や労働者は水浸りの激しい労働をするので、ス・フではとても駄目だから、此方面だけは矢張木綿にしよ

うといふ理由を別にしてどうにも考へやうがありません。して見ると商工省がス・フを信用しない事を天下に表明した事になるのですが、とは云ふものゝ、商工省も大變な事で、あの謹嚴な藏相池田さんが末次内相を怒つたり、織維工業課長が問屋街に押しかけて、國策演説をやつたり、中々樂ではありません。

此頃の事、新橋驛から掏摸が汽車に乗

り込んで、その被害者が「なぜ掏摸なんかに切符を賣つた」と鐵道省へネヂ込んだところ、鐵道省では見當違ひだと受けなかつたといふ話を聞きました。

藝界にはス・フなんてのも、車中で掏摸にやられて鐵道省へ苦情を申込んだなどの話は聞きませんが、わけて理解心に富まるゝ方々の多い我が淨曲界に於てをや、流石に國粹藝術の神髓を究められた賜物であります。

偕て、齋藤拳三氏が毎號本誌に執筆されてゐる義太夫雜話中、前號には妹背山の評が出てゐましたが、それに就き弊社の爲めに二三の方々から御注意がありました事を深謝致します。

私は乍殘念妹背山は遅れて聞き洩しま

したが、後で、山の掛合は素晴らしい出来であつたといふ事を聞いてよるこんでゐました事で、さて〳〵人様の耳は千差萬別だと思ひました。

そこで、藝評だけなら兎も角あの中に誠に厭とはしい言葉があるといふので、御立腹の向きには何んとも恐縮に堪えませんが、御尤もの次第で、私自身も再讀して驚きました。

實は永い間執筆されてゐる齋藤氏に、今日まで筆禍もなかつたので、私はいつものやうに安心をして原稿も讀まずにそのまゝ印刷所へまはし、校正の際に赤字だけを直して、さて出来上がつた時に「これは」と思ひましたが、何しろ發行が遅れてゐましたので、遂にそのまゝ發行し

てしまひました。

猿之助師が高座へ後から現はれた事に就ては、某師が何かの都合で後から出られる爲め、猿之助師も止むを得ないのでらうといふ話を耳にしましたので、追てその事情を書く事もあらうかと思ひ、幸ひ二三行のアキへ記者曰と附記して置いた次第です。

藝評に限らず寄稿されたものは、善かれ悪しかれ掲載するのが機關誌で、社としてはその寄稿されたものについて、削除は勿論訂正する事は出来ませんが、人身攻撃に亘るやうな言葉は、注意すべき事で此點お詫びを致します。

去る日、齋藤氏に逢ひましたので、此の話をしました處『とんだ事になつたものだ、遂に油が乗て筆が走つたので貴社には何等關係のない事、自分で書いたものは自分で訂正をしませう』と言つておられました。

兎に角、私も災難とあきらめておます。

## 拙評妹脊山に就て

前號、妹脊山の拙筆に就て主幹富取氏に對し御迷惑をかけたる由、あれは全く小生が拜聴した感じを有りのまゝに書きましたもので、富取氏の關知せざる處ですから、右惡しからず御了承を願ひます。

某師が某俱樂部でお品よく薄茶を喫し乍ら『一體齋藤拳三といふ奴は何者です』と、富取氏に詰問されたさうですが、私の住所氏名は左記の通りであります。

御愛讀を賜つた讀者から左記小生住所まで御葉書でも頂けば、取消し、訂正、謝罪いすれでも御申越次第に致しますが、成可ならばあのままにして頂きたく御願ひいたします。

理由は目下文樂座上京中にて、見學の爲多忙で締切りに間に合はず、御海容の程をお願い致します。

八王子市八幡町十五番地

七月十二日

齋藤拳三

# 本社創立 十週年記念 義太夫大會

趣味と研究を目標とし、併せて道徳思想の教化と皇道精神宣揚の一助にもと、國粹藝術の淨瑠璃機關誌「太棹」を發行、此間、三越、松屋、白木屋、松坂屋の各ホールに於て演奏會を催し、斯道の普及と向上に努め、茲に弊社が十週年を迎へました事は、東都素義界の皆々様を始め、全國愛義家大方諸彦の御後援の外なく厚く御禮申上ます。

實は昨年十週年に相當致しました處、支那事變の勃發に鑑み記念會の開催を遠慮し今春早々と思ひましたが、種々大會が打續きましたので、これ等大會を避けて來ました處、遂に好季を逸し暑さに向ふ時となりましたがそれにも不拘皆様の絶大なる御後援に依りまして七月六、七の兩日芽出度記念大會の開催を得ました事は弊社の光榮此上ありません。

時節柄聽衆のやゝ薄かりし事は遺憾でありましたが、兩日とも定刻前より入場、終演まで一人も立たず熱心の聽衆は眞の愛義家であることを證しました。御繁忙中御出演を賜つた方々の御芳意難有感謝致します。

## 第一日 (抽籤順)

組	打	平井周樂氏	陣	屋	手塚てつか氏	安	達	安藤都昇氏
		平井昌子			竹本播志保			竹本都太夫
			太	十	村越越廣氏	本	下	島倉仙昇氏
					鶴澤蟻三郎			竹本朝見太夫



乃木將軍	鳴門	鯨屋	忠六	太十	帶屋	八陣	引窓	合邦	梅由
近江清華氏	小川都川氏	歸山歸世花氏	川奈部銀司氏	鈴木喜三子氏	岩木義雀氏	吉田登盛氏	乃村乃菊氏	野田高尾氏	平井壽樂氏
鶴澤寛三郎	竹本都太夫	豊澤扇之助	野澤道之助	かなめ氏代演 鈴木喜三子氏 鈴木花代	豊澤良造	野澤彖造	竹本佳照	豊澤良造	竹本朝見太夫
十種香	太十	彌作	戀十	寺子屋	忠六	第二日 (抽籤順)	長局	忠七	新口村
大用大嘉津氏	田口司重氏	廣瀬いろは氏	保々長平氏	小楚長とろ氏	武笠宏亮氏		黒川叶氏	河野國聲氏	國井丸都氏
豊澤猿藏	豊澤團吉	豊澤團市	鶴澤龜造	豊澤團市	豊澤鶴助		鶴澤玉勝	豊澤猿三郎	竹本都太夫
陣屋	鳴門	寺子屋	聚樂町	鯨屋	安達	宿屋	寺子屋	殿中	先代
井上巽氏	角井豊氏	星野桔梗氏	吉良蟻若氏	的野關路氏	北村三葵氏	宮本百塚氏	根本團壽氏	湯原清司氏	藤本喜鳳氏
鶴澤絃平	竹本清松	鶴澤辰六	竹本清松	豊澤猿藏	豊澤團市	竹本播菊	鶴澤龜造	豊澤猿藏	野澤道之助

御

禮

弊社儀、今回創立十週年記念義太夫會開催の節は絶大の御後援を賜り且つ御鄭重なる御祝ひを忝ふ仕り御蔭を以て盛會裡に無事終了致し光榮此上も無御座難有厚く御禮申上候

一々參上御禮申上べき筈の處乍略儀書中を以て御禮申上候得共茲に御後援御出演諸氏並に御芳情を賜り候皆々様の御尊名を記し永く記念と仕り候

なほ今後とも何卒御援助御鞭撻を賜り度偏に御願申上候

昭和十三年七月

太 棹 社

富取芳河士

御後援御出演諸氏芳名 (抽籤番組順)

【初 日】

安藤 都昇殿

平井 周樂殿

手塚てつか殿

島倉 仙昇殿

吉田 登盛殿

岩木 義雀殿

野田 高尾殿

乃村 乃菊殿

歸山 歸世花殿

小川 都川殿

飛石かなめ殿

川奈部 銀司殿

河野 國聲殿

黒川 叶殿

近江 清華殿

國井 丸都殿

武笠 宏亮殿

【三日目】

武笠 宏亮殿

武笠 宏亮殿

小埜長とろ殿 保々 長平殿 廣瀬いろは殿 田口 司重殿  
 大用大嘉津殿 藤本 喜鳳殿 湯原 清司殿 根本 團壽殿  
 宮本 百塚殿 北村 三葵殿 的野 關路殿 吉良 蟻若殿  
 星野 桔梗殿 角井 豊殿 井上 巽殿

御芳情を賜りし諸氏芳名 (順不同)

井上 素鳳殿 橋本 三司殿 近江 清華殿 駒 登 會殿  
 大築 葵殿 白井 清華殿 大用太嘉津殿 南條 壽光殿  
 野口みなと殿 山田 壽瓢殿 齋藤 山生殿 坂倉 素遊殿  
 原田 越巴殿 淺田 奇聲殿 疋田 大龍殿 三口 松藤殿  
 田中 司若殿 中道 素鶴殿 和田 春和殿 田中 煙亭殿  
 西田 可松殿 中澤 巴殿 鈴木 和樂殿 勝田 松雨殿  
 柴野 筑波殿 金井 辰稻殿 本多 可笑殿 中山 美浪殿  
 米澤 春樂殿 及川 旭殿 高瀬 操殿 清水 彌生殿  
 安藤どくろ殿 玉井 松樂殿 桑原 美峰殿 竹本津太夫殿  
 豊竹古靱太夫殿 鶴澤 網造殿 鶴澤 清六殿 鶴澤觀西翁殿  
 桐竹 門造殿 竹本都太夫殿



# 音曲昔噺素養(十)

大阪 鐵 老 (寄)

今昔耳鳥齋主人の號は浪花音曲研究古  
考家として其名廣く、舊與銘人の事を辨  
へ、世上に融通せり。「文政の通人古太瓶  
藥居」親しく門に入て聞くに「昔噺の滋  
味理曉を、草紙の端に書きとゞめ、友樂  
初心者助けにもと」云々とあり、撰擇し  
て致て一夕の笑樂の具に供し參らせん。

## 操り芝居の言

義太夫節は浪花を元として、五畿内を善し  
とする。其の故は他國にも上手に語る人も有  
べけれども、義太夫節の音備はらず、假言東  
武の板子節、伊勢の河崎音戸、その外國々の田  
植歌まで、浪華の人よく諷ふ眞似れども、節は  
似れども音は似せる事能はず、はその國々土  
地に備はりが、かはる音あるゆへなり、淨瑠

璃には惣名にして、文に節あるは何にて淨  
瑠璃なり。是はお通の十二段より、夫れん  
へ別れたり、浪華の人淨瑠璃とのみ覺へ居る  
は、義太夫節なり、京都の人は今に於て、此  
唱へ別れり。

諺には家元あり、義太夫節は家本なき故、  
やりやすい儘に語るとも、誰か咎むる者もな  
く、心有る人は忍びて笑ひ嘲るばかりなり。  
さすれば至つて六ヶ敷藝なるべし、万人の稱  
より一人の笑を恥ふとは、諸藝の禁しめなり  
諸藝とも總て昔に譲ると雖も、義太夫節ほど  
劣りたるはあるべからず、中古名ある太夫故  
人となりて、年數遠からざるに、義太夫節の  
風儀大きに替り、東西花賞の別ちもなく、銘  
々氣儘流儀となりたり。古人を偲ぶは諸道の  
法なり、古人に便り少かりとも、古法を聽求  
め風儀ありたき事どもなり。

# 高田だより

北 仙

東京へ出ての道樂とイッパ、上野へ朝着  
いて、朝湯にひたり、米久て肉鍋で飯、こ  
れですつかり活き返ると云ふわけ、私共老  
人には窮風のベンチで、化物様の女給で、  
黄色な聲のサーピスでは……。矢張イナセ  
の若い衆に下足を預けて、トンくと二階  
へ、日本髪の前垂れ女中での給仕が落着く  
様である。

一日の商用を電車で乗り切る内に、時に  
はハイヤー位のソフットに納まるのも悪くは  
ない、夜行迄の時間待ちには出來得る限り  
義太夫、さも無ければ鈴本亭あたりの寄席  
之れ位は私の給金として店の者も許してく  
れる。

旅宿を取るとなれば、吉右衛門を先づ一  
線に都新聞を探ぐる事。

處が時局この方、朝湯が無くなつたと同

## 聲を熟する事

昔より一聲二節と云ふ事は、義大夫に移りよく、四音五音明定して一越、平調、双調まで兼れ揃ひ、息き次ぎ長く、文名明らかなるを、一聲といふなり。當世大将聲といひて大聲あり、尤も小音よりはよしと雖も、餘り太く大きな聲は、小まはりせず、振り廻し自由ならず、これ等は下手聲と云ふ。又は太きしはがれかかるきばり聲を、玄人といへども左にあらず、上品にして糸移りよくみずくさからず甘からず、ニガミありて口捌きよく自由に届くをこそ、善しと云ふべし。または肩かぬ處に面白味ありて、文句の情を語る、是本旨がゆへに能く通す。

むかしは如斯妙音あると雖、當世は少しと見へたり、聲はその人の持前より、外に別仕様あるべからず、悪聲小音と雖、日々夜毎に語れば、小音は大音と成り悪聲にも妙出て自然に妙を得るものなり。

故人上總大夫嘉助綱太夫等は、生れついたる悪聲なれども、熟して後に妙音となりぬ。只だ一心以て爲す時は得ぬ事はあるべからずたゞに凝りたまへ、語り給へよかし。

## 藤田西湖氏の

### 治療報國

支那事變勃發以來、種々の要務に忙殺されてゐた甲賀流忍術十四代藤田西湖氏は、此程要務も一段落したので、今後は銃後の治療報國を念として、専心病氣治療に従事し病者救済に努力さるゝ由である。氏は廿年來の研究と幾多難症治療の經驗に依り、醫藥も効なくあらゆる治療も効果のない難症でも治癒するといふ自信を持てゐられる。

治療時間は午前九時より午後二時迄とし、初回二四次回より一圓づゝであるが、詳細は本郷區根津須賀町七藤田西湖氏(電話下谷八六六二呼出)方へ問合せられたし。

### 表 装

本郷區菊坂一

芋 弘 堂

様、十時限りの興行、最もの話で天井知らずの江戸の贅澤も此邊で一度は見直ほす要もあるといふもの。

時に東都義大夫の御連中如何です、避暑の御氣分で、北陸海水浴場へ御遠征は。相馬御風先生を驚かせる程の大天狗の御降臨を待つこと久さし。

### 相馬御風先生の手紙

新緑薫風の候彌々御健勝大慶奉存候先頃は色々御高示に預り御芳情奉感謝候

義大夫は書生時代、小生も夢中になり(聞くことのみ)し事有之、おなつかしく存じ候御健勝いやが上にもと祈り居候

六月三日

糸魚川町

相馬御風

北仙様



## 第廿八回東都五十義會に於ける 東西兩大關並に入賞祝賀會

東都五十義會第廿七回に於て東大關の榮冠を擔つた高瀬操氏は、今回の第廿八回もどつしりと動かさず東大關に据り、同會には初めて出演して斷然西大關の地位をしめた及川旭氏、それに昇點入賞をした金田金鳳氏の祝賀の宴は、六月十八日午後六時から淺草仲見世「水月」で開かれた。

此日招待の案内をうけた記者は定刻に出席した處、會場には既に口繪寫眞の如

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。  
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。  
▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

く「第廿八回東都五十義會野澤道之助門下」の大文字の下には東西兩大關旗が嚴然として飾られ、早くも芽出度い空氣は堂に溢れ、瀧の飛沫に庭の青葉は清々しく、池中の大鯉も今日の賀宴を壽ほぐかのやうに見えた。

かくして兩大關を始め入賞金田金鳳氏を出した野澤道之助師の譽れは輝やかしい限りであつた。  
當日の列席者は高瀬操、及川旭、金田

金鳳の三氏に五十義會理事細川清、井上巽、柴野筑波、藤本喜鳳、村田玉寶、齋藤正鳳、川奈部銀司、千葉千昇の諸氏の外、歌吉、越道、越國、淨瑠璃時報社並に本社。

### 水害御見舞

小林隅斗氏 六月廿九日神田

川氾濫の爲め、住宅並に工場が倒壊と共に流失。

山田壽瓢氏 九十九里濱に於

ける同氏所有の養魚池は出水の爲め被害甚大。

小松瓢六氏 床上浸水。

此外相當御被害の方もある事と存じます。誌上を以て御見舞申上ます。

太悼社

# 清樂會生る

近江清華氏を主宰として、鶴澤寛三郎

連の内輪ばかりの極めて睦じく語り樂しむといふ『清樂會』が生れ、六月十三日夕から入谷俱樂部でその初會が開催され

た。組打(幾子) 吉田屋(靜子) 御殿(春子) 玉三(清壽) 油屋(朝正) 乃木將軍

## 人形淨瑠璃九臯會

武笠宏亮、柴野筑波氏に依り人形淨瑠璃『九臯會』が組織されその第一回が七月廿五日午前十時半から日本橋三越ホールで開催される事になつた。番組は左の通り。

壽式三番叟(吉田社中) 阿漕(樽) 忠六(宏亮) 沼津(筑波) 日高川(若松若太夫) 喜内(花王) 合邦(阿津滿) 絃(豊澤鶴助、鶴澤紋三郎) 人形(吉田冠十郎一座)

## 文樂座引越興行の盛況

紋下竹本津太夫以下豊竹古鞆太夫(鶴澤清六) 竹本鏡太夫(豊澤新左衛門) 竹本大隅太夫(豊澤廣助) 竹本相生太夫(鶴澤道八) 豊竹呂太夫(鶴澤叶)を始め、駒、文字の兩太夫を除くの外大擧して、

吉田榮三、吉田文五郎、桐竹門造、桐竹紋十郎等外總動員の大阪人形淨瑠璃文樂座引越興行は、藝題四回替りとして七月一日より十三日迄華々しく新橋演舞場に開演。時節柄如何かと懸念されたが、一

日毎に客足は増して尻ツ跳ねの大盛況を極め、一年振りの同座は茲に芽出度終演をした。

## 第五回中老會

六月十八、十九兩日午後六時より入谷俱樂部に開演。今回より松岡茂里雄、淺田奇聲の兩氏が入會された。

(初日) 本下(有明、新兆) 太十(奇聲、和歌吉) 帶屋(春和、衆造) 寺子屋(紅司、勝鳳) 鰻谷(越巴、廣助) (二日目) 八陣(有明、新兆) 酒屋(可松、衆造) 合邦(茂里雄、清助) 紙治(操道之助) 長局(松玉、玉勝)

## 淨無名會

前號既報の通り六月廿八日午後五時より丸の内電氣俱樂部に開催されたが、今回は中澤巴氏は休演された。

太十(美浪、團八) 帶屋(和か葉、猿三郎) 沼津(和樂、猿藏) 合邦(國聲、猿三郎) 堀川(美峰、猿之助、美之助)

## 東京人形淨瑠璃藝術復興會

# 戰傷將士慰問演藝

池田三國氏の東京人形淨瑠璃藝術復興會は、六月八日赤十字病院にて、同廿二日陸軍第二病院にて戰傷將士慰問の演藝會が催はされた。

先代(浪花太夫、猿藏) 辨慶(長平、龜造)

(陸軍第二病院) 陣屋(みなと、良造) 辨慶(司重、團吉) 先代(操、道之助)

朝顔(浪花太夫、道之助)

## 若手會

六月廿四日交正俱樂部で開催されたが鈴木松實、近江清華、鈴木和樂の三氏が賛助出演された。

先代(團壽、團龍) 本下(松蝶、團龍)

忠四(三葵、猿藏) 寺子屋(松實、團八)

乃木將軍(清華、寛三郎) 坂の下(和樂、猿藏) 太十(美浪、團八)

# 全國義太夫を聴く會

柳原伯と三室戸子を迎へ、小島メ氏主催鶴澤綱造師後見の下に名古屋、濱松、清水の素義合同の義太夫を聴く會が、六月廿六日午後二時から名古屋瑞竹莊泉竹演藝場で催はされた。

## 綾秀會

六月十一日多賀良俱樂部に開催。今回鈴木其芳氏が参加された。

鈴ヶ森(綾路) 岸姫(壽光) 柳前(綾登) 松王(龍司) 柳奥(其芳) 寺小屋(壽

瓢) 絃(綾秀、龍太郎)

## 大東京嬉會

七月二、三の兩日菊川俱樂部に開催。

(初日) 辨慶(岡玉) 日吉(清子) 鳴門(龜遊) 太十(青柳) 本下(文鏡) 寺

子屋(三好) 坂壺(花昇)

(二日目) 先代(かなめ) 八陣(園樂)

梅山(喜三子) 忠六(時昇) 忠三(和光)

## 兜會花組

寺小屋(和泉、廣駒) 十種香(登昇、住繁) 忠三(燕路太夫、廣駒) 堀川(玉鳳、友三郎) 紙屋(金昇、命語) 鮎屋(三笠、住繁) 佐太村(自樂、三平) 太十(社本、住繁) 御殿(メ、友三郎) 逆櫓(聲

野崎(東松)絃(花代、三好、蝶子、仙照)

今や我國內外の情勢は益々重大事局に直面し、東亞永遠の和平と國運の躍進に獻身すべき折柄、帝都義連中最も上達且好評を博しつゝ在りし、神田區神保町同仁會事務長蘇水氏は、同會の診療班兼防疫班事務長となり支那山西省太原に、官民多數の歡送裡に萬歳の聲勇ましく邦家の爲め壯途に出發せり、因に同班は醫學博士外一行八十有餘名にして、昭和十三年六月二十三日午後一時半東京驛發。

(三好)

### 竹本彌國太夫

#### 後援義太夫會

竹本彌國太夫師は淺草千束町に稽古場を開き、近頃頗る賑つてゐるが、七月八日午後一時より入谷俱樂部で彌國會、中老會、音女會後援左記番組の下に同師の後援義太夫會が催ほされた。

陣屋(熊谷、靜子、敦盛、新兆、玉織、照子)絃(彌國太夫)志渡寺(龜鶴)玉三(照子)八陣(有明)辨慶(秀玉)

鳴門(孔雀)草履打(花光)日吉(井駒)寺子屋(長とろ)新口(力)縮屋(米司)壺坂(湖月)太十(榮)酒屋(松玉)井子(文司)乃木將軍(清華)鰻谷(操)忠四(春和)大切(七段目掛合)由良之助(彌國太夫)重太郎(榮)力彌(力)彌五郎(龜鶴)喜多八(文司)亭主(有明)おかる(操)平右衛門(春和)

#### 出征軍人傷痍將士

#### 遺家族慰安の會

大阪高麗橋三越ホールに於て、六月廿九日午前十一時より傷痍將士遺家族慰安乙女文樂人形淨瑠璃が開催された。

酒屋(松鳳、吉右)天理教祖傳(友榮、

#### 寄贈新刊

▼明るい家▼ましる▼淨曲新報▼土▼文樂▼痴遊雜誌▼寶塚月報▼露▼瀨祭▼大日本淨瑠璃雜誌▼可樂▼オール演藝▼淨瑠璃時報▼藝▼京城のラヂオ▼こども衛生▼不動產通信

天海)辨慶(みやこ、吉右)義重勘太郎(天海彈語)三河屋義兵次(二木、吉右)松山要住家(三調、天海)堀川(和十、組之助、源花)この外歌舞伎劇「揚屋」が上演された

#### 吉川司遊氏三周忌

#### 追善義太夫會

六月十四日午後一時より吉川司遊氏の三周忌追善義太夫會が左記の人々に依つて催ほされた。

手向草(小六、喜代子)忠六(豊茂、松造)玉三(里芳、勝助)酒屋(拍、松造)矢口(叶、三福)合邦(大龍、松四郎)合邦(巽、絃平)寺子屋(祖樂、三福)沼津(昇、三福)山名屋(福代、三福)宿屋(喜鳳、道之助)忠六(高峯、松造)忠四(旭、道之助)酒屋(金語、喜代子)陣屋(玉寶、道之助)寺子屋(司若、松四郎)八陣(松藤、松四郎)大切(野崎村掛合)久作(叶)お染(喜代子)久松(瓢六)お光(小六)母(花子)およし(芳子)絃(三福、喜代子)

本誌後援名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

高島 一廣氏  
 廣瀬 いろは氏  
 岡崎 田六氏  
 吉川 浪補氏  
 平野 ろ昇氏  
 阿部 一氏  
 北島 北斗氏  
 中澤 巴氏  
 竹内 とる氏  
 安藤 どくろ氏  
 吉田 登盛氏  
 小川 都山氏

安藤 都昇氏  
 保々 長平氏  
 栗原 千鶴氏  
 神馬 里芳氏  
 本木 大熊氏  
 鈴木 和樂氏  
 小林 和舟氏  
 本多 可笑氏  
 大和田 可笑氏  
 飛石 かなめ氏  
 加藤 兜氏  
 高橋 可遊氏  
 西田 可松氏

大用 大嘉津氏  
 田口 辰壽氏  
 疋田 大龍氏  
 井上 巽氏  
 小林 太二八氏  
 根本 團壽氏  
 野田 高尾氏  
 坂倉 素遊氏  
 浮谷 祖樂氏  
 小埜 長とる氏  
 宮本 武藏氏  
 萩原 うつぼ氏  
 乃村 乃菊氏  
 中野 吳羽氏  
 清水 彌生氏

國井 丸都氏  
 松林 福笑氏  
 鈴木 兒雀氏  
 水戸部 壽氏  
 原田 越巴氏  
 河野 國聲氏  
 松岡 語松氏  
 松田 光風氏  
 田中 湖月氏  
 寶藏 寺天昇氏  
 大築 葵氏  
 松本 朝章氏  
 及川 旭氏  
 柳 有明氏  
 寺岡 三幸氏

木村 さかえ氏  
齋藤 山生氏  
平 井 榮氏  
細 川 清氏  
金 田 金鳳氏  
井 田 菊泉氏  
錦 錦 松氏  
淺 田 奇聲氏  
歸 山 歸世花氏  
川 奈 部 銀司氏  
猪 谷 銀水氏  
岩 木 義雀氏  
吉 良 蟻若氏  
岩 田 末成氏  
高 瀬 操氏

吉田 美地句氏  
横 井 三由氏  
野 口 みなと氏  
岡 田 源氏  
北 村 三葵氏  
池 田 三國氏  
吉 田 三芳氏  
鈴 木 松寶氏  
玉 井 松樂氏  
菊 池 秋月氏  
平 井 壽樂氏  
山 田 壽瓢氏  
田 口 司重氏  
濱 口 秋華氏  
武 笠 宏亮氏

高 品 一重氏  
桑 原 美峰氏  
松 岡 茂里雄氏  
白 井 清華氏  
近 江 清華氏  
湯 原 清司氏  
沼 井 盛鶴氏  
時 田 靜史氏  
(地方之部)  
米 國 平野一昇氏  
同 武 榮玉氏  
同 杉 山 陶岳氏  
同 兼 廣 廣玉氏  
同 西 本 西紫氏  
榑 太 宮 下 杉鳳氏

横濱 田 島 集樂氏  
大垣 吉岡 十八公氏

名譽會員

田 中 湖 月 氏  
時 田 靜 史 氏  
小 埜 長 と ろ 氏  
北 島 北 斗 氏  
吉 良 蟻 若 氏

本號より本誌後授名譽會員  
を御快諾賜り難有御禮申上  
候

太 棹 社

# 當座帳

▼豊澤團造 横濱市中區長者町一丁目へ轉居。

☆佐野美昇氏 本名平を多以等と改む  
 ☆菊池秋月氏 日本橋俱樂部に於ける「からす會」に出演、豊澤猿三郎の絃て「長局」を演奏。

☆小林昭八氏 同上「合邦」絃鶴澤辰六。

☆田幡鐵鳳氏 同上「辨慶」絃竹本東太夫。

☆神馬里芳氏 里芳女史の夫君は目下痘毒にて加療中。

▼竹本津賀太夫 日本帝都因會を退會。

▼鶴澤鶴玉 神田區和泉町一丁目八番地へ轉居。

▼鶴澤玉勝 淀橋區柏木一丁目一六三番地へ轉居。

▼豊澤芳太郎 有樂座上演の歌舞伎レヅニウ「義經千本櫻」を作曲、六月二日より廿六日迄。竹本朝見太夫、豊竹巴太夫、竹本卯太夫、豊澤團七、豊澤扇之助、豊澤松市郎、豊澤美之助出演。

▼竹澤龍造一座 四國路巡業中の同一座は六月卅日初日釜山太平館を振出しに七月五日より十五日間京朝日座に開演。なほ龍喜代、龍富美は淺草公剛オペラ館のアトラクシヨウに出演。七月二日よりは木挽町銀映座へ出演

## 編輯後記

◆久方ぶり文樂座の東上で、皆々様も御多忙をお極めの事と存じます。その中に弊社創立十週年記念會を開催致し、御繁忙をお重ねした事は恐縮の至りでありますが、それにも不拘御出演を御快諾賜り賑々しく盛會裡に記念會を終了仕り誠に難有深謝申上ます。

◆近江清華氏は、叶太夫師から新作『乃木將軍』を教はり、最近は氏の獨專物として頗る好評を博してゐます。弊社は此の『乃木將軍』の臺本を寫して、次號に發表させていたゞく事になつてゐます。

◆金丸丸氏の『ラヂオ淨曲漫評』は次號にゆづりました、御了承を願ひます。

◆梅雨もあけまして愈々猛夏に向ふ折柄皆々様の御健勝を祈ります。

— 芳河士 —

(行發日五廿回一月毎) <b>號七拾九第</b>		定	一	部	金三十錢	郵稅	三錢
		價	六月分	金一圓八十錢	郵稅	共	
告	廣	一	年分	金三圓	郵稅	共	
料	普	一	通	一頁	金貳拾圓		
特	別	一	頁	金參拾圓			
▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます ▼誌代は總て前金御拂込の事 ▼なる可く振替に御送金の事 ▼郵券代用は一割増但三錢切手 の事							
昭和十三年七月十三日印刷納本 昭和十三年七月十五日發 行 東京市小石川區音羽二丁目四							
編輯兼 發行人 富取 壽鹿 東京市牛込區早稻田町五八 印刷人 栗原 榮松 東京市牛込區早稻田町五八 印刷所 栗原印刷所 電話牛込二四五一番							
東京市小石川區音羽二丁目四 發行所 太棹社 振替東京三一七八番							

皆様の理想にピッタリとした独特の特品

新考案

# レコード スタンド ケース

今までにない

素晴らしい

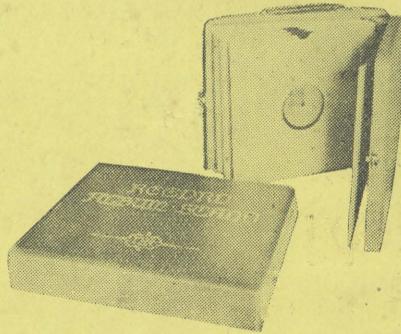
アルバムケース

です

レコード音楽

愛好家の皆様に

是非!!



特長

- 1 超モダーンの体裁
- 2 アルバム式(十二枚入)
- 3 携帯便利
- 4 堅牢至極
- 5 価格低廉

發賣以來非常な好評を戴いてをります。三越本店及一流樂器店にて販賣致して居ります。

美術ケース  
荷造箱  
蒲鉾板  
家具一式

東京市深川區清澄町二丁目十一  
錦ケース製作所

考案者

電話本所(73)二七六四番  
錦學四郎

宣傳中特價 ¥ 3.00 (十吋) ¥ 4.20 (十二吋)

著者装幀

# 新刊 田代子規後集

頒價金壹圓五拾錢  
送料金拾錢  
第一版品 薄切  
第二版品

本書は著者が曩きに昭和六年四月十日先考三十三回忌に田代子規時代集を上梓供養したと同様、本年五月十一日先妣五十回忌に際し紀念出版するもの、卷頭著者の言葉に「……第一句集は正岡子規先生在世中私淑してゐた私の姿であり、第二句集は子規先生終焉後明治俳句の混沌として依據すべき處なき——一種の俳界戦亂——時代を冷観して私は私の進むべき道を拓かんとする著者の處女作を口繪する等、近時豪華を誇る此種出版物が所謂大家の序跋讃頌題詩句を賣物させる中に、巍然として詐らざる自己を表現せる處著者の面目耀々たるものがある。

西宮市川添町十一番地

發行所 關西藝術新聞社

振替口座大阪七〇二九六番

發賣所 俳書堂

振替口座東京二七一〇九番  
電話丸ノ内(23) 四八〇〇番

昭和十三年七月十三日印刷  
昭和十三年七月十五日發行

太棹 (第九拾七號)

定價 金參拾錢